

聖書:ルカの福音書16章14~18節

説教:律法の一画が落ちるよりも

はじめに

前回のところ少し振り返ります。イエスはパリサイ人たちが聞いているのを意識しながら一つのたとえ話をします。ある管理人が不正をしていたことが主人に見つかり、懲戒免職されそうになったとき、この管理人が債務者を呼んで負債を無条件で減らして恩を売り、職を失った後でも食べるのに困らないようにしました。なんともずる賢い話ですが、もっとも困惑したのは、それを見ていた主人だけでなく、イエスもこの管理人のしたことを高く評価したというところでした。常識とは正反対の話ですので、予想はしていたのですが、やはり皆さんから難しかったという声がたくさん寄せられました。きょうの箇所は前回の箇所とも深いつながりがありますので、少し前回の補足をしてからきょうの箇所を見ていきます。

## 1 「富」

### 1) マモン

前回の箇所で難しいと感じる理由がいろいろありますが、その中でも「富」と訳されていることばが鍵であろうと思います。だれでも富と聞いて真っ先に思い浮かぶのはお金とか財産ですから、例えば9節で「富がなくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいに迎えてくれます」とあるところは、「お金がなくなったら天国に行けますよ」ということになります。もしそうであれば、貧乏人は救われるけれど、お金持ちは救われない、そんなおかしい話なってしまいます。

ではどういうことなのか。種を明かすと、この「富」と訳されていることばは「マモン」と発音するのですが、それが聖書の中でここにしか出て来ない。かなり珍しいことばが使われていて、調べてみると単純にお金と財産という意味ではなさそうなのです。そのため他の聖書では「富」と訳さないうで、そのまま「マモン」といとしているものもあるくらいです。

### 2) 不正の富

では、「マモン」とはいったいなにか。イエスが語ってくださったたとえ話から推測することができます。不正な管理人が、悪いことであると知りながら堂々と証文を書き換えさせたことを指して9節で「不正の富」「不正なマモン」と言っています。

これをわかりやすくするために、「強欲」「恥知らず」「厚かましい」ということばに置き換えてみても間違いはないでしょう。

でもそれで全部すっきりしたわけではありません。イエスは、「不正の富で、自分のために友人をつくりなさい」とか、「不正な富に忠実でなければ、まことの富を任せられない」と言っています。「自分の強欲さで自分の友をつくれ。」「恥知らずなことをしたらまことの富を任せます。」これではまったく意味がわかりません。

この問題は今日の箇所とも関連していますので、そこを整理しながら考えていきます。

## 2 パリサイ人

### 1) 金銭を好んでいた

イエスが語るたとえ話を聞いていたパリサイ人たちの反応はこうでした。14節。「金銭を好むパリサイ人たちは、これらすべてを聞いて、イエスをあざ笑っていた。」

パリサイ人たちが金銭を好んでいたことが、あたかも悪いことであったかのように書かれています。これを読んで不安になるのではないのでしょうか。クリスチャンはお金に執着するなどということか。いったい、お金がなかったらどうやって生活していくのか。それともクリスチャンはみな生活保護を受けろということか。もちろんそんなはずはないでしょう。

### 2) 心の中にあったこと

ではどうしてわざわざ「金銭を好んでいた」と言うのでしょうか。その理由についてイエスは15節で指摘します。「あなたがたは、人々の前で自分を正しいとするが、神はあなたがたの心をご存じです。人々の間で尊ばれるものは、神の前では忌み嫌われるものなのです。」

「人々の前で自分を正しいとし、人々の間で尊ばれることをする。」いったいどんなことか。具体的にはこういうことでした。これは律法学者の例ですが、ルカの福音書20章46、47節にこう書かれています。「彼らは長い衣を着て歩き回ることが好きで、広場であいさつされることや会堂の上席、宴会の上座を好みます。また、やもめの家食い尽くし、見栄を張って長く祈ります。」

おわかりのとおり、すべて目に見えることです。これが「人々の前で自分を正しいとする。」

「人々からすばらしいですねと言われるようなこと」です。パリサイ人律法学者たちはいつも外側だけを見えています。

では神はどこをご覧になっているのか。外側ではありません。神がご覧になっているのは私たちの心の中。たとえどんなに見える所では立派に振る舞っていようと、心の中には何があるのか。神はそのことを問いかけてきます。パリサイ人の心のなかにあったのは、14節が示すように「金銭」です。それもただ好きだったということではなく、お金に執着していたということです。ここで誤解のないように確認しておきますが、先ほども言ったように、心の中でお金に執着していたことが問題だと言っているわけではありません。問題は別です。

### 3) 神と富に仕えようとする

そのことは、13節の後半に出てきます。「あなたがたは、神と富とに仕えることはできません。」

パリサイ人は、自分たちこそ正しく神に仕えているという自信があります。どれくらい自信があるかと言えば、例えばイエスが罪人と食事をしているのを見つくと、たちまち目をつり上げるようにして非難し、イエスが安息日に病気の人を癒やすものなら、安息日の規定に違反していると言って腹を立てる。このように律法に違反している者を見つけ、それを彼らなりの神への仕方、これこそが正しいことだと信じて疑いません。しかしイエスは指摘するのです。あなたがたは、表向きには神に仕えていると言って自分を正しいとしているけれど、心の中では不正の富、マモンという強欲に仕えているのではないですか。神に仕えながら、マモンにも仕える。そんなことは絶対にできないはずなのに、無理矢理に両方に仕えようとするなら、どんな結果になるのか。

### 4) 天の御国に力づくで入ろうとする

それが16節です。「律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音が宣べ伝えられ、だれもが力づくで、そこに入ろうとしています。」

私たちが今手にしている旧約聖書のことを、イエスの時代は律法と預言者と呼んでいました。パリサイ人たちがその律法と預言者を大切にしなければと考えたのには、それなりの歴史的な理由がありました。先ほどCSメッセージでも取り上げましたネヘミヤの時代がそうです。神にそむき続けたイ

スラエルが外国に攻められて荒廃してしまったのは、律法に背いたからだ。そういう反省があったのです。ですから最初の動機は決して間違っていないなかった。ところが時間が経つうちに最初の純粋さが失われ、だんだん人間の考えが入り込んで間違った方向に行ってしまう。そんなとき、洗礼者ヨハネの後に来られたイエスは神の国が近づいた、悔い改めなさいと語りながら、神の国の福音を宣べ伝えます。罪を告白し、悔い改めて神の国に迎えられる。その道筋をイエスは教えてくださいました。

ところが、神の国に力づくで入ろうとする者が出て来た。それがパリサイ人です。彼らがどれだけ無理矢理に入ろうとしたのか。そのことを言い表したのが17節です。「しかし、律法の一画が落ちるよりも、天地が滅びるほうが易しいのです。」

律法の一画が落ちるといふのは、日本語の例でたとえば、「太い」という漢字から真ん中の点を落とすと「大きい」という漢字になって、まるつきり意味が違ってしまふ。それとよく似ています。一画を落とすということは律法のことばをねじ曲げることになる。聖書のみことばに忠実であると言ひ張るパリサイ人は、当然、律法の一画を落として、律法をねじ曲げるなど天に唾する不敬なことである。そのように言うでしょう。

### 5) パリサイ人の真の問題

しかし、彼らしていることはまさにそんなことだった。確かに彼らは目に見える所では律法を守ることに熱心で神に仕えているつもりでしょう。でも、心の中で金銭に執着し、マモンに仕えていることは絶対に認めようとしません。心の中のことはほかの人には見えません。自分から言いださない限りだれにも気づかれない。隠しておけば何も問題がない。それが彼らの考えです。

しかしイエスははっきりと言います。「神はあなたがたの心をご存じです。」たとえ人に対して隠しておいても、神の前にはそうはいかない。神はご存じである。ということはどうなるのか。パリサイ人は、心の中で罪を犯していながら、一方では自分を正しいとし、神の国に入る資格があると言ひ張っていたことになる。それこそが、律法をねじ曲げて、力づくで入ろうとする態度だった。いったいどれくらい律法をねじ曲げる話だったのか。そのことを説明するために18節が出てきます

### 3 イエス

## 1) 神とマモンに仕えるなら姦淫の罪となる

18節を読みます。「だれでも妻を離縁して別の女と結婚する者は、姦淫を犯すことになり、夫から離縁された女と結婚する者も、姦淫を犯すことになります。」

先ほどまでパリサイ人の態度について語っていたかと思ったら、どうしてこんな話になるのか。何の説明もありませんから戸惑ってしまいます。パリサイ人は、姦淫の罪についてはだれよりも厳しい態度で臨み、仮に姦淫の現場をおさえようものなら、有無を言わず引っ立てて取り締まるほどのことをしています。

そんなパリサイ人たちこそ、姦淫の罪を犯している。18節はそのことを言おうとしています。ここはいっけん夫と妻のことを言っているように見えますが、そうではない。イエスは姦淫の意味をもっと広く使っています。神とマモンの両方に仕えようとする態度こそが姦淫を犯すことだと言っているのです。姦淫の罪を厳しく取り締まっていたパリサイ人が、実は神の前では姦淫を犯していた。なんとも皮肉な話しですが、イエスに言わせれば、もしそんな方法で神の国に入れるというのなら、天地が滅びる方が易しい。つまり絶対にできないことでした。

## 2) 不正の富に忠実であるとは

最後に考えます。ではいったい、私たちはどうしたらよいのでしょうか。皆さんは、神に仕えたいという純粋な願いはあると思うのです。しかしその一方でお金のこと大事だと思う心もあるのではないか。そうするとどうしても心が痛くなる。やっぱり自分もパリサイ人たちと同じではないのか。神から忌み嫌われて天の御国には入ることができないのだろうか。

ここで、横に置いていた問題に戻ります。「不正の富で、自分のために友をつくりなさい。」「不正の富に忠実でありなさい。」これはどういう意味だったのか。不正の富、それは「強欲」「恥知らず」「厚かましき」とも言い換えられると言いました。いずれも共通しているのはなんでしょう。悪いことを堂々としていること、隠さないということです。悪いことをしたはずの不正の管理人がほめられたのはなぜだったのでしょうか。自分のなかにある強欲、厚かましさを隠さないで表に出していったから。

驚くかもしれませんが。でも私たちの心の中に何があるのでしょうか。何か良いことがあるのでしょうか。なにもない。あるものと言ったら、不正の

富、すなわち強欲、恥知らず、厚かましき、罪と呼ばれるものしかない。

そんな不正の富で友となり、永遠の住まいに迎えてくれる方とはどなたでしょうか。いったい不正の富に忠実であるならまことの富である永遠のいのちを与えてくださる方とはどなたですか。おひとりしかいないでしょう。救い主イエス・キリストしかいない。パリサイ人たちは、マモンに仕える心を隠し続け、不正の富に忠実ではありませんでした。

しかし私たちはそうではない。主イエスが私たちの友となってくくださるので、安心して心の中にある罪を神に申し上げることができます。